

李炳憲における「神道設教」

The Religious Viewpoint of Lee-ByongHeon

小林 寛

Hiroshi KOBAYASHI

キーワード：孔教・李炳憲・神道設教

Key Words : Kong Jiao, Lee-ByongHeon, Religion

はじめに

本稿においては孔教運動の東アジアにおける展開という観点から、李炳憲の宗教把握とそれに関わる「神道設教」をとりあげたい。孔教を主唱する康有為は西洋列強に対抗しうるには精神的支柱として、キリスト教に対抗しうる宗教化された儒教がなければならぬと考え、1898年6月、孔子の経典を尊重し、国教と為し教部と教会とを設け、孔子紀年を採用し、淫祀を廃すべきだとの上書¹⁾を光緒帝に奉じた。

孔教運動に連関して半島では1908年に李完用・由箕善らが創立した「大東学会」が成立する。「大東学会」は1909年10月、名称を「孔子教」とする。1909年9月には朴殷植・張志淵らによ

って康有為の孔教運動を受容して「大同教」が組織され、朴殷植は「宗教説」で宗教の重要性を強調しつつ、儒教の正理である事を主張し「儒教求新論」では民を中心とした実践的な改革論を提示している。朴殷植は陽明学を基準としつつ、康有為の大同思想を受容している。李承薫の「孔教会」は1913年に創始され、道学派の伝統を継承しつつ、中国で設立された「孔教会」に加入し、性理学の基礎の上に独自の孔教を形成している。彼は日本による大韓帝国「併合」後、満州へと亡命し、1913年北京孔教会の支会としての「東三省韓人孔教会」を始めた。当時、清は康有為の影響下にあり、孔教会の中には儒教改革を唱えない儒学者も多く、李承薫はむしろ伝統儒教の側からの儒教再組織を言い、「孔教教科書論」「孔教進行論」

等を孔教会雑誌に発表する。半島の孔教運動としては他に1932年の安淳煥の「朝鮮儒教会」があつて朝鮮の始祖とされる壇君を孔子と並立させた改革儒教を提唱している。²⁾

こうしたなかで康有為の影響を受けるにとどまらず、康有為の弟子となつて朝鮮の孔教会運動を推進するのが李炳憲であつた。李炳憲の「孔教会」は中国曲阜の孔教会と関連を持ち、1923年、培山書堂を設立し、康有為の理念にもとづく孔教運動を展開している。

1 康有為の孔教

まず李炳憲の師にあたる康有為の孔教の基本的性格を確認しておきたい。康有為によつて主張された孔教の、儒教改革論の論拠として、康有為の公羊学を始めとする今文経学の立場がある。『新学偽経考』では、「古文經典」は王莽の「新」王朝において劉歆によつて偽作されたものであるとし、これを新の学の意で新学と称して批判している。古文經典は偽作で、孔子の真意は伝わらないとし、古文經典の伝統とは異なる今文經典の伝統による儒教を掲げる。『春秋董氏学』では、孔子が春秋に微言大義によつて潜めたものが公羊三世説に見ることができるとし、時代の発展と制度改革の根拠としている。『孔子改制考』では孔子は祖述者ではなく、昔の聖王に仮託して制度の改革を求めた「託古改制」の創始者だとする。すなわち、孔子は儒教の創始者であることになる。さらに『大同書』によつて世界が大同へと向かう未来の理想世界が描かれる。

『孔子改制考』『新学偽経考』『春秋董氏学』は儒教を国教化する根拠として康有為自身にも意識されていたもので、「請尊孔聖为国教立教部教会以孔子紀年而廢淫祀折」³⁾においてはこれらの著作が「宸覽」を乞うものとしてあげられていて、次のように言う。

窃かに惟るに孔子の聖は光日月と併び孔子の經は流くこと江河に亘る。豈に臣愚を待ちて贊発する所ならんや。惟ふに中國は尙ほ多神の俗を爲し、未だ専ら教主を奉じて以て徳心を發するを知らず。子を祈れば則ち張仙を奉じ、財を求むれば則ち財神を供し、工匠は則ち魯般を供し、甚だしきは士人の學に通ずるものも乃ち跳舞の鬼、号して魁星と爲すものを拜す。学宮巍樓在る所、高高として座し鎮り、之を胄する士夫齊しく祈り膜して拜し羞恥を知らず。凡そ其の學ぶ所何學を爲すかを忘る。⁴⁾

孔子の聖は日月とならび、孔子の經は長江や黄河のように流き亘る。中国はまだ多神の俗を為していて教主を奉じて徳心を發することを知らないでいるという。教主を奉ずる儒教へと変革することが国教としての儒教に要請されていることになる。儒教の教主は孔子でなければならない。

夫れ神道もて教を設るは聖人の許す所にして郷曲は必ず廟賽を禱るは是れ資なり。而して牛神蛇鬼、日に香火を窃み、山精木魅、謬りて廟祠を設け人心を激励する所無く、俗を尙ほ風導

する所無し。徒に妖巫に欺惑せしめられ、神徑に人を驚められて、虚しく牲體の資を糜し、日に香燭の費を竭す。而して歐美に遊ぶ者、視て野蠻と爲し、像を拍ちて專觀し、以て笑柄を爲し、中國を爪哇・印度・非洲の蠻俗と等しくするのみ。國に大恥を爲し民に少益無し。夫れ民を教え俗を正し礼を修め教を重んずるは此れ豈に細故ならん哉。⁵⁾

「神道設教（神道によって教えを設ける）」⁶⁾は聖人が許したところであつても、中國に神異による民俗信仰が盛行しているのを歐美に遊ぶ者が見たら、中國がジャワ・インド・アフリカのような野蛮な国だとみるだろうと述べる。こうして宗教の中でも国教は正学である儒教によらねばならないことになる。康有為においては神異による教えは教主を奉じる国教たりえないと考えられている。

夫れ大地の教主、未だ神道を託ずして以て人を尊信せしめるものは有らず。時に地に之を爲し、神道を假らずして能く教主を爲すものは、惟だ孔子の眞文明世の教主のみ有り、大地に無き所也。⁷⁾

孔子は「中國の教主」であり「改制の教主」であるとして、他の教主が神道に偽託して人を尊信させるのとは異なり、神道に仮らずして教主となっているのは孔子のみで孔子こそは「眞文明世の教主」であり大地にないところであると強調する。

夫れ中國人擧げて皆孔教也。將に教を治め途を分かつしめんと欲すれば専ら職業以て之を保守せしむるに若くは莫し。官に教部を立て地方に教会を立てしむ。首に宜しく制を定め、國を擧げて淫祀を去り棄てしめ、京師城野省府県郷自ら皆孔子廟を獨立せしめ、以て孔子を天に配し人民男女皆之に祠謁し積菜奉花せしめ、必ず聖經を黙誦せしむ。郷市に在る所、皆孔子教会を立て、士人の六經四書に通ずる者を公擧して講生と爲し、七日を以て休息し、聖經を宣講し、男女皆聴かしむ。講生は奉祀生を兼ね聖廟の祭祀洒掃を掌る。郷の千百人に必ず一廟、廟毎に一生、多くの者之を聴く。⁹⁾

康有為はすべて中国人は挙げて孔教であるという。儒教を国民が尊重するための方法として專業職によって儒教を保守させることを述べる。中央に教部を設け、地方に教会を立てさせ、まず制度を定めて淫祀を去り、国内の処々に孔子廟を獨立させて設けること、孔子廟では孔子を天に配享し、男女百姓が誰でも参拝し、積菜、奉花し、聖教を黙誦し、村落ごとに孔教会を設けることを提案している。民間の男女が誰でも孔子の廟堂に奉参し、信仰の自由の精神によって、祭天儀礼も天子の特権ではなく、百姓が誰でも天を祭祀することができるようになすべきだと言う。そして、孔教会の教職者として郷の講生、司の講師、縣の大講師、府の宋師、省の大宋師、全国の祭主を職別に設定しようとする。7日ごとに休職し、經典を講論し百姓が聞くことができるようにし、祭祀を行うようにすべきだとする。

康有為の宗教については以下のように言えよう。中国において儒教は単に「教」と言うだけであって「教」には神道・人道の区別は無いとする。ところが日本人が英語の Religion (釐里近) を訳すときに二字を習用し、仏教の諸宗を加量して詞を為して、神教を語意として「宗教」としたという。釐里近は神教の意味のみで語意を尽くすことはできないという。古代には神道を尊び近世には人道を重んずるように進歩するのが宗教であって、儒教はよく進歩した教であり宗教であるとする。孔子をイエスに比して、孔子は儒教の教主であるとする。教部・教会もキリスト教に比されている。康有為における宗教は「教」であり神道・人道を包含して考えられており、人道に重きをおいて考えられている。

2 李炳憲と孔教との出会い

李炳憲は二七歳に郭鍾錫に会い、朱子学を受業した。三四歳に『中庸』を読みながら、儒教保守のための「保教の念」を持ったという。この年、ソウルに上京し南山に登った折、日本人が敷設する電車と電線、鉄道と鉄橋の架設等に開化文化を見つつ、伝統道学の個人として自己を善に保つ「獨善保身」の方法が新しい時代に対応するのに限界があることに慨嘆した。南山から下りつつ、清の戊戌変法記を読んで、東アジアの変化と康有為の人物であることをしり、よく世務に通じ、しかも旧を守りつつ新を排さずして自立の計を為していることを知るに至った。これを契機として『泰西新史』等の西洋近代文物に関する書籍を求めて読み、その後、アメリカ人アレ

ンの『万国広報』に触れ、世界の情勢に対する知識を吸収しつつ、既に開化思想への転換を自ら成していた。

1910年、四一歳に、日本の大韓帝国の国権を奪い「併合」する事態に遭遇し、教育が最大の急務であると覚える。郷里の書堂で義塾を設けるために尽力したが、日本の「私立学校令」にこれをはばまれ、ソウルに再び上京し、朴殷植と孫秉熙らに会いつつ、愛国啓蒙思想を形成した。彼は中国の革命運動の報に接し、中国へ渡行する決意をした。

1914年、四五歳に中国へ渡行し、康有為と出会う。儒教改革思想家として彼の一生の重大な契機となる。李炳憲は北京で孔教会と孔道会を訪問し、当時北京で活動していた李承薫に会い、孔教会本部がある曲阜を訪問しながら孔教会に少しずつ深く入って行った。このとき、李炳憲は北京にいつつ、そのときまでの自分が形成してきた思想的認識を整理し、『宗教哲学合一論』を著した。李炳憲は第一次の中国渡行で、香港に康有為を訪ね、教えを乞う。康有為は李炳憲に儒教を民族精神の生命力を起す宗教として覚醒し、儒教を再建することで国権の回復を図ることができると強調した。李炳憲が朱子学と陽明学のどちらに注目したら良いか尋ねると康有為は陽明学を重視することを述べている。康有為の儒教改革論が朱子学的なものから離れ、各学派にとられないものとなっていることがわかる。李炳憲は康有為と出会い、教えに感受するところが大きく、康有為を李承薫と朴殷植に紹介している。そして、朴殷植とともに再び康有為に会う。

1916年、四十七歳に、また半島から中国へと渡行し、杭州に康有為を尋ねた。朴殷植とともに康有為と会談しつつ、「韓国儒教」の改良問題を長時間討論した。さらに国府を訪問し、孔教会総会に参加した。帰国して後、儒教を宣伝し国粹を保持しようとする、意志から『中華遊記』を著述した。この時期に朝鮮総督府は、「宗教令」を発表しつつ、儒教を宗教から除きつつ「共同墓地管理規制」によって祭礼は必ずしも儒教によらないとした。このことに対し、李炳憲は「韓国人」が生きて儒教を守ることができなくなり、亡くなくても家族単位の廟に入ることができなくなることで、これが民族精神を忘れ民族の消滅を招く遠因となる危機感を持って積極的な反対の意志を明らかにしている。朝鮮総督府に数通の長書を送っている。

1918年から孔教を保持するために文廟を設立して教祖を尊敬して義理を守ろうと決意し、李退溪の後孫の長老たちを訪ね、培山書堂の設立、改革に同意を求めている。

1919年に李炳憲は『儒教復原論』を著述し、孔教思想の基本体系を確固たるものとし、同時に日本政府と日本首相の大隈重信に儒教を宗教として認めるよう願う書簡を出している。彼は、当時、朝鮮に孔子の聖像と通行している経典を康有為の助けを得て中国から招来するために中国へ行くことを計画する。彼は大同斯文会と陶山書院の協力を仰ぎつつ、1920年、五一歳に第三次の中国訪問をした。このとき康有為は李炳憲の『儒教復原論』を論評し、今文経学の重要性を積極的に述べつつ今文と古文の分別を明らかにせず

に公羊伝の理論が明らかにされねば孔子の三世説と太平、及び大同の意味が表れてこず、今日の変革に対応することができないとした。そして、本源の学問は必ずや今文によってこそ可能であるとした。これによって李炳憲は康有為の『新学偽経考』を中心として今文学研究と自国の歴史とに心を用いて、現時代の大勢に相通しようとするのだとして『歴史教理談』を著す。大民族の立場に立ち儒教的に歴史を記述した。

1923年、培山書堂の文廟と道東祠が落成し、五十四歳に第四次中国訪問をした。青島に康有為を訪ねた。このとき康有為は李炳憲にヨーロッパが功利主義と進化論によっており人々に安心を与えることができず、だからこそ孔子の核心を尊重する状況が起こっていることを指摘した。同時に中国にあっても、孔子を尊重する雰囲気は回復していることで、孔教運動が時代的要請を受けていることを強調した。特に康有為は李炳憲の著述を見、新しい儒教を生み出せると認め、今日、東方に新しい儒教が行われることは今より始めるのだとした。李炳憲は一方では今文経学の文献を求め、もう一方では朴殷植、李始榮、趙琬九・金九等の臨時政府の要人たちからも培山書院の支持をうけ、孔卓から孔子の聖像を招来して帰国した。この聖像が培山書堂に置かれた。聖像は書堂の文廟にまつられ、釈奠を挙行した。後に培山書院の道東祠に李退溪と李曹植が祀られ、李炳憲自身の先祖である李源・李光友とともに祀られた。しかしこのことが地方の保守的儒林の批判を招き、祭祠が中断する事件が起こっている。この事件によって地方儒林の排除に遭い、培山書院で

の孔教運動の実践は挫折して行く。

1924年、李炳憲はしかし、自らの孔教運動を放棄はせず、日本の帝国図書館に入りして資料を収集する等、孔教の經典としての基礎である今文学研究を続け『孔教大義』を著述した。1925年、五十六歳に第五次の中国訪問し、杭州の康有為を訪問してそれまでの経過を報告している。この時、同文印書局を訪ね『儒教復原論』『孔教大義』『業書』を印刷した。1926年、中国から帰国した後、『詩経附注三家説考』『書経伝注今文説考』『礼経今文説考』『易经今文考』『春秋筆削考』を著述し、今文教学の体系的理解を追求し続けた。¹²⁾

3 李炳憲の孔教と「神道設教」

李炳憲において儒教は宗教であった。李炳憲が考える儒教の性格については「儒教復原論」にそれが表れている。

問ふ、儒教とは何の教ぞやと。答ふ、儒教とは孔子の教也と。
 問ふ、この教也、堯舜禹湯文武周公の道を修めて教と爲す者に非るか。答ふ、孔子の道は固より堯舜文武の道にして其の教を爲す所以は則ち異なる也と。問ふ、詳かに得て聞く可きかと。
 答ふ、諸を水に譬ば江淮河濟固より水也。東海も亦た水也。然るに江淮河濟則ち九州の内に流通し、東海則ち諸を四溟の外に放つ。孔子の堯舜禹湯文武周公の道を修めて集大成するは猶ほ東海の江淮河濟の水を収めて大洋を爲すがごとき也。故に堯舜

禹湯文武周公の道則ち支那の一世に行はれて孔子の教則ち大地の萬世に垂る。蓋し能く天下後世の大衆を救ふが故に教と曰ふ。且つ孔子は儒者也。特に儒を以て其の教を名づくるなり。¹³⁾

儒教とはいかなる教えかという問いについて儒教は孔子の教えであると答える。ではこの教は堯・舜・禹・湯王・文王・武王・周公の道を修めて教とするものとは異なるのかという問いには、孔子の道はもとより堯舜文武の道でおなじではありながら教を爲す所以を異にしていると答える。詳かに得て聞くことができるかという問いには、これを水に譬えるならば長江・淮水・黄河・濟水ももとより水であつて東海もまた水でおなじであつて、然るに江淮河濟は九州の内に流通し、東海はこれを四溟の外に放つものであつて、孔子が堯舜禹湯文武周公の道を修めて集大成したのはちようど東海が江淮河濟の水を収めて大洋を爲しているようなものと答へ、故に堯舜禹湯文武周公の道は支那の一世に行われた教で孔子の教は大地の万世に垂れるもので、おもうに能く天下後世の大衆を救うものであるために教というのだとしている。さらに孔子は儒者であつて特に儒によつてその教を儒教と名づけたものだという。ここからすれば儒教と孔教とは本質的な差異があるのではなく時空の広大さ量の差異があるのみであることになる。

問ふ、吾道の統、堯舜禹湯文武周公孔子自り以て顔曾思孟程朱
 退票に至るまで皆以て是れ傳受す。而して子儒教と言へば則ち

單に孔子を擧ぐるのみは何ぞやと。答ふ、上は堯舜禹湯文武周公の聖有り。而も孔子の大且つ備に若かず。下は顔曾思孟は聖の才を以て當に志を繼ぎ事を述べて未だ體を具へるも微なるを免れず。程朱退栗は則ち愈よ降りて愈よ殺れ大道漸く隠る。況や儒教の名専ら孔子に因て發すれば則ち孔子の我が獨一無二の教主爲るは亦た較然として明らかなること甚しからず乎。印度無量の諸佛有ると雖も仏教を爲すは必ず釈迦世尊を稱す。猶太許多の先知無きに非ずして景教を爲すは必ず耶穌基督を稱す。その意亦た猶ほ此のごときなり。¹⁵⁾

儒者にとつて、吾が道統である堯・舜・禹・湯・文・武・周公・孔子から顔回・曾參・子思・孟軻・二程子・朱熹・李退溪・李栗谷に至るまで皆儒教の道統を伝受しているのに、先生が儒教と言うときは單に孔子を挙げるだけなのはなぜかという問いに、上つかたは堯・舜・禹・湯・文・武・周公の聖があつても、孔子の大かつ備なることにはおよばないし、下つかたは顔回・曾參・子思・孟軻は聖の才を以てまさに志を繼ぎ事を述べて未だ體を具えたとしても微であることを免れないし、二程子・朱熹・李退溪・李栗谷については、いよいよ時代が降りいよいよまぎれて大道はしだいに隠れてしまつてゐる。ましてや儒教の名は専ら孔子によつて發つたものであるからには孔子が我が儒教の獨一無二の教主であるのは亦た較然として明らかであることは甚しいことではなからうか。印度の無量の諸仏があるといつても仏教をいうのには必ず釈迦世尊をい

う。ユダヤ教には許多の先知が無いわけではないのに景教をいうのには必ず耶穌基督をいう。その意は亦たちやうど儒教の場合のようなものであると答えてゐる。

李炳憲は半島の儒者らしく李退溪・李栗谷の名を掲げている。しかしながら李退溪・李栗谷についてさほど高い評価を与えないことについては今文学の立場からして当然ではあつても半島の儒者の反發を生ずる遠因となつてゐる。宗教という語について李炳憲は次のように記してゐた。

問ふ、儒教の宗教たる所以、孔子の教祖たる所以の者、得て詳かに聞く可き歟と。

答ふ、宗教の稱、譯するに英文の釐里尽 Religion 自りして來たる。日本の維新の初に在りて釐里尽を譯して宗教と爲す。或ひは法教と稱するも當時、宗字を用ふるに因る。然るに儒教の教の字、毫末も加へずして其の意自ら足れば則ち必ずしも宗の字を添へざる也。但だ、挽近以來、極東の名詞、世界現行の教を以て通じて之を宗教と謂ふ。而して宗の字、又、神秘的色彩を帯ぶれば、則ち烏んぞ孔子を以て非宗教家と爲さんや。孔子の孔子たる所以は則ち其の教主たるを以てす。其の教主たる所以は則ち配天の量の、萬世の民を救ふを有するを以てする也。蓋し四代の禮樂、三統文質、何ぞ聖王の隆起の、一字の義制に非ざる無し。而して能く萬世に通ずるは孔子也。精氣游魂よりして鬼神の情狀を發す。大易の窮神と曰ひ盡神と曰ふは精靈界の

事を爲すに非ざる無し。而して其の雅言に至れば則ち生を求めて仁を害ふこと無く、身を殺して仁を成すこと有り。皆、生靈を重んじて肉體を軽んずる所以、天人の極致を明らかにす。諸を西教に較ぶれば天堂地獄の論、亦た円活にして真切ならざる乎。故に諸を支那の前聖に比ぶれば則ち多く世間の法に出づ。而て諸を西方の教祖に較ぶれば多く世門の法に入る。此れ儒教の性質、西教に異なる所以にして政治・哲學は孔子の餘事に過ぎざる也。儒教の宗教觀念、孔子の教祖の地位、此に見る可し。¹⁶⁾

儒教が宗教である所以と、孔子が教祖である所以とについて詳らかに聞くことを求めるといふ問いをおき、ここでは答えとして以下のように述べている。宗教という名称は英文の Religion より来るもので、日本の維新の初にあつて「釐里尽」を訳して「宗教」とした。ある時は「法教」といったりもしたが当時、宗字を用いたのに因つたものである。然るに儒教の教の字は毫末も加えないでも其の意は自ら足りているのであるから必ずしも宗の字を添えないのである。但だ、挽回以来、極東の名詞は世界現行の教を以て通じてこれを宗教と謂うのであつて、宗の字は、また神秘的色彩を帯びているのであるからどうして孔子を非宗教家であるとすることができようか。孔子が孔子である所以は則ちその教主たるを以てするものである。その教主たる所以は配天の量の、万世の民を救うことを有することによつていのである。おもうに四代の礼楽、三統文質はどうして聖王の隆起の、一字の義制でないことがあるうか。そして能く万世

に通じているのは孔子である。精氣游魂から鬼神の情状を發している。大いなる易に「窮神」といい「尽神」というのは精靈界の事である。而してその雅言に至れば則ち生を求めて仁を害うことも無く、身を殺して仁を成すことも有る。皆、生靈を重んじて肉體を軽んずる所以、天人の極致を明らかにしたものである。これを西教に較べるならば天堂地獄の論は、また円活にして真切ではないか。故にこれを支那の前聖に比べるならば則ち多く世間の法に出ている。そしてこれを西方の教祖に較べるならば多く世門の法に入つている。此れこそ儒教の性質が西教に異なつていゝ所以であつて政治・哲學は孔子の餘事に過ぎないのである。儒教の宗教觀念と、孔子の教祖の地位とを、此に見ることができると、このように述べる。

ここに表れている「宗教」の説明において、李炳憲は康有為と同じく、日本人が英文の Religion (釐里尽) から訳出したことに言及している。¹⁷⁾ 康有為と軌を一にしながらも異なる点は「宗教」の「宗」の字について、康有為は日本人が宗の字を付けて神教のみを内容とする概念にしたと述べるのに対し、李炳憲は「宗」の字はもとより不要で、儒教の「教」の字で意味が充足しているので宗の字を添えないと述べるに止めているところに表れている。李炳憲は「宗」の字は神秘的な色彩を帯びると言う。ここからすると「宗教」は神秘性を有する概念であることになる。そして、儒教の「教」はこの字のみで「宗教」の意味を充足しているのであるから、儒教にも神秘性が既に内在しているとす。孔子が教主である所以を述べる箇所を孔子の教が万世に通じ万民を救うものであること、又、性靈を重

んじて肉体を軽んずる教であることを述べている。すなわち、儒教は人間の現世のみを部分的に取り挙げるものではなく人間界のみならず天地のすべてを包含しているもので、かつ、性霊の神秘的で出世間的性質を持つと李炳憲は言う。一方、西方の教祖に比べると儒教は世間に入っており、儒教は人道と神道の中庸を得ているという。さらに儒教の核心は性霊を重んじて天人の極致にあり、政治・哲学は余事に過ぎないと言う。儒教は哲学・政治・教育の言説であるとする立場を批判する。こうして、李炳憲における「宗教」は、人道に重点を置いたものではなく、神道の側面に主眼を置いた説明になっている。康有為が古代は神道を重んじ、近世は人道を重んずるように進むと説明するのは異なった面を見せている。

李炳憲は孔子が宗教の教主であることの根拠として、易の言を引いて次のように言う。

孔子の宗教家たるが若きに至れば則ち莊嚴燦爛たる其の精義、具はりて大易の神道設教の四字に在り。豈に非宗教を以て之を
目す可き乎。⁽¹⁸⁾

ここでは李炳憲は、孔子が宗教家であることに議論が至るならば莊嚴燦爛たるその精義は大いなる易の「神道設教」の四字にそなわっているのであって、どうして宗教ではないとって孔子を見ることでできようか、という。李炳憲は易の「神道設教」の四字が孔教たる儒教の宗教性を端的に表すと考えている。易における「神道設教」⁽¹⁹⁾

の語は觀卦の象伝に見られる。天の神道は四時戈心わなないというこ
とを主旨とする文で、秩序有るくすしき法則を神道としている。聖
人は神道をもって教えを設け天下が服すというのであるから、法則
にかなった道を聖人がしめすことになる。易経に云う「神道」は天
地至神の道を指し「神道設教」は天道をもとにして教えを設けるな
らば天下の者はみな服することをいって、必ずしも神異を語る
ものではない。しかし李炳憲は「神道設教」を孔子が宗教家である
ことの根拠とする。李炳憲は孔子を現世の政治あるいは哲學家に過
ぎないとする説に反論している。

孔子を以て非宗教家と為す侮辱の声日に高し。⁽²¹⁾

一に曰く、孔子は非宗教家にして、世界の宗教家は皆な出世間
の意味を含み、別に神秘の色彩有り。而して孔子は則ち現世の
政治或は哲學家に過ぎざる而已と。⁽²²⁾

李炳憲は孔子を非宗教家だとするのは侮辱の物言いでであると考えて
いる。孔子は非宗教家であって世界の宗教家はみな出世間の意味を
もっていて別に神秘の色彩があり、孔子は現世の政治家あるいは哲
學家に過ぎないというのは鄙人の言説であるという。李炳憲によれ
ば孔子は神秘家であり宗教家であることになる。李炳憲が述べるよ
うに「神道設教」が儒教の神秘性・宗教性の根拠であるとする場合、
秩序あるくすしき法則があること、道があること自体が神秘的だと

いう解釈をすることになる。「怪力乱神」を語るのではなく、あくまでも秩序に適った力・神が存し、それを經典として設教していることが、儒教の神秘性すなわち宗教性であることにもなる。易経は孔子が「神道設教」によって制作した大いなる経であって、六経の主脳であるという。⁽²³⁾ 儒教の宗教性を神秘性に見ることが理解され、さらにその神秘性は「神道設教」の「神」に存することが理解される。先に見た「観」卦について「易経今文考通論」には次のように言う。

設教の二字、經中の第一の着眼処也。⁽²⁴⁾

「神道設教」の「設教」は経のなかでも第一の着眼点であって、「神道設教」によって聖人は救世の教主であることになる。こうして孔子が設教したのであって、儒教は即ち孔教であるという根拠となる。とはいえ「神道」にのみ意義があるわけではないことは確認しておかなくてはならない。

或る者、佛耶の二聖は皆な出世間の法、其の情を絶ち戒を種とする所以を主とし、慾に淫することを爲すこと勿れと謂ふ。投胎すれば則ち人を使って死して塵間の苦趣に墮るを免れしめ、魂を天堂に遊ばしめ、同じく極樂に幸福を享けんと欲せしむ。然れども人、本より慾を多くするが故に又た未だ形を受くるに復すことに随ふを免れず。佛耶二聖更に爲して法を設け、世界を

化して競争の舞台と爲す。大いに兵火を降し或は付して悪疾に卑して人種を滅ぼして後同じく天堂に歸すとす。是則ち必ずしも知る可からざる事也。又必ずしも行ふ可からざる説也。是以て孔子は神道を以て設教すと雖も然れども人より遠からずして以て道を爲す。以て斯の世に無窮に存する所以なり。⁽²⁵⁾

ある者は仏陀と耶蘇の二聖はどちらも出世間の法であって、その情を絶ち戒を種とする所以を主とし、慾に淫すること勿れという。投胎すれば則ち人を死んで塵間の苦趣に墮れることを免れさせ、魂を天堂に遊ばせ、同じく極樂に幸福を享けようとねがわせる。けれども人はもともと慾を多くするために、また形を受けるこの世にもどることに随うのであることをいまだ免れえない。佛耶二聖はそこで更に法を設けて、世界を化して競争の舞台として、大いに兵火を降し或は悪疾におとして人種を滅ぼして後、同じく天堂に歸すものとした。これは則ち必ずしも知ることができない事である。また必ずしも行うことができない説である。ここからすれば孔子は神道を以て設教するとはいっても然れども人より遠くはなれることがないようにして道を為している。こうしてこの世に無窮に存する所以なのである、という。「神道設教」によって孔教があり「神道」に重きを置いていのであるけれども、人とこの世を離れないことが儒教の無窮である所以だと李炳憲が考えていることがここに表れている。

おわりに

李炳憲における「宗教」は「神道」の面に重きを置いて説明がなされている。神道は易経に由来する語でくすしき道をいい神道設教は神道によって教をなしていることをいう。李炳憲は儒教の「教」字には既に神秘性が有り、あえて宗教と言わなくてもよいとする。儒教は精霊を重んじ天人の極致にあり、軽重から言えば精霊を重んじて肉体を軽んずる教であるとする。ここからすると儒教における政治・哲学は余事であり、儒教を政治・哲学説と捉えることは誤りであることになる。かくして李炳憲は儒教を政治説・哲学説とする見方を批判している。儒教の宗教としての核心は「神道設教」にあるとされ、「宗教」の性格としては神道に重きを置き、儒教は「神道」を核心とすることを述べようとする。

李炳憲の「神道設教」において「神道」が重視される根拠として「上帝」の存在がある。「帝は神の称である」と李炳憲は言い、人と上帝とは「神」によって通じうる。上帝は時空を越えた存在者、感覚によって捉えられない存在者であるとされ「太極」は上帝の代名詞であり、理としても理解されうるとされる。儒教は「神道設教」によって孔子により教として成立したもので、「神道」は秩序ある法則として存し、天人を合一する教となっている。時代が進むことで哲理が強くなり迷信が除かれることで宗教と哲学は合一し、既にその両者を区別せず合一している儒教は孔教として世界の大同の教となると考えられている。その一方で儒教が無窮であるのは「神道設教」でありながら人の世から離れないところに所以があるとする。

註

- (1) 康有為「請尊孔聖為国教立教部教会以孔子紀年而廢淫祀折」国家清史編纂委員会『康有為全集』第4集中国人民大学出版社1998年96頁を参照されたい。
- (2) 琴章泰「儒学近百年」傳英社1984年、同「続儒学近百年」驪江出版社1989年等を参照されたい。琴章泰教授の諸著作には韓国近代儒教の動向が詳述されている。
- (3) 康有為「請尊孔聖為国教立教部教会以孔子紀年而廢淫祀折」国家清史編纂委員会『康有為全集』第4集中国人民大学出版社1998年96頁を参照されたい。
- (4) 国家清史編纂委員会『康有為全集』中国人民大学出版社1998年96頁を参照されたい。
- (5) 国家清史編纂委員会『康有為全集』中国人民大学出版社1998年96頁を参照されたい。
- (6) 易による神道把握になる。
- (7) 康有為は孔子が神道にからずして教主となっているとする。康有為「請尊孔聖為国教立教部教会以孔子紀年而廢淫祀折」国家清史編纂委員会『康有為全集』第4集中国人民大学出版社1998年97頁を参照されたい。
- (8) 「百姓」とする。
- (9) 康有為「請尊孔聖為国教立教部教会以孔子紀年而廢淫祀折」国家清史編纂委員会『康有為全集』第4集中国人民大学出版社1998年98頁を参照されたい。
- (10) この記述については拙稿「李炳憲における孔教(2)」『目白大学人文学部紀要』地域文化編第5号15頁を参照されたい。
- (11) 韓国学文献研究所編『韓国名家文集選』『李炳憲全集上』亜細亜文化社1988年3頁にある「略伝」を参照されたい。
- (12) 以上の記述については拙稿「李炳憲における孔教(1)」『目白大学人文学部紀要』地域文化編第2号37頁を参照されたい。
- (13) 「儒教復原論・第一章儒教の名義」韓国学文献研究所編『韓国名家文集

- 選『李炳憲全集上』亜細亜文化社1988年177頁を参照された。
- (14) この場所に「後第5章に詳論当に参看すべし」と註が入っている。「第五章儒教の範圍」には同主旨のことが述べられ、堯舜禹湯文武周公は支那の古聖であり孔子は天下に通行すると語られる。
- (15) 韓国学文献研究所編韓国名家文集選『李炳憲全集上』亜細亜文化社1988年178頁を参照された。
- (16) 「儒教復元論・第二章儒教の性質」韓国学文献研究所編韓国名家文集選『李炳憲全集上』亜細亜文化社1988年179頁を参照された。
- (17) 康有為は「釐里近」とし李炳憲は「釐里尽」として用字の差が見られる。両者の差異については拙稿「李炳憲における孔教(2)」『目白大学人文学部紀要』地域文化編第5号15頁を参照された。
- (18) 「警古域内同胞儒林」韓国学文献研究所編韓国名家文集選『李炳憲全集上』亜細亜文化社1988年159頁を参照された。
- (19) 琴章泰「真庵全書解題」韓国学文献研究所編韓国名家文集選『李炳憲全集上』亜細亜文化社1988年3頁にもこのことは述べられている。
- (20) 『易経』「観」卦 象傳を参照された。
- (21) 韓国学文献研究所編韓国名家文集選『李炳憲全集上』亜細亜文化社1988年159頁を参照された。
- (22) 韓国学文献研究所編韓国名家文集選『李炳憲全集上』亜細亜文化社1988年160頁を参照された。
- (23) 「易経今文考通論」韓国学文献研究所編韓国名家文集選『李炳憲全集上』亜細亜文化社1988年を参照された。
- (24) 「易経今文考通論」韓国学文献研究所編韓国名家文集選『李炳憲全集上』亜細亜文化社1988年を参照された。
- (25) 韓国学文献研究所編韓国名家文集選『李炳憲全集上』亜細亜文化社1988年214頁を参照された。

Abstract :

This paper delineates the religious viewpoint of Lee-ByongHeon (李炳憲).

Lee-ByongHeon was born and brought up in the Korean Peninsula in the 20th century. He became a disciple of Kang-YouWei (康有為) who established the religion, Kong Jiao (孔教), in China. Lee introduced Kong Jiao into the Korean Peninsula. Kong Jiao is composed of two major theories, Ren Dao (人道 religion of people) and Shen Dao (神道 religion of God and deities). Lee-ByongHeon put more emphasis on Shen Dao while Kang-YouWei focused more on Ren Dao.